

IV-20

自己概念が居住地選択に与える影響

東北工業大学 学生員 ○中居 良行

東北工業大学 正会員 青木 俊明

1.背景と目的

社会基盤計画の策定には、住宅立地の予測が不可欠である。しかし、現在の都市部には社会的非効率を受け発生した新興住宅地や分譲マンションの売れ残りが依然として残り、空洞化が生じている場所も少なくない。そのような社会的課題を解決するため、多くの居住地選択モデルが開発されてきた¹⁾²⁾。そこでは物理的条件、個人の物理的属性を主要因として、住宅需要予測が行われてきた。しかし、現実場面では、物理的条件・属性以外に、居住者や居住地区の物理的条件以外の要因が作用し、選択に影響を及ぼしていることも考えられる。そこで、本研究では、選択者の内的特性から居住地選択の意思決定機構を考えることを目的とする。

2.研究の位置付け

社会心理学では、意思決定の際に自己概念(「自分は○○な人間である」という意識)が重要な役割を担い、様々な選択に影響をもたらすことが言われている³⁾。その例として、NiedenthalらのPrototype Matching(以下、PM)が挙げられる⁴⁾。PMとは、人が意思決定を行う際、自己概念と選択対象の認識を対比し、自己概念に一致しやすい認識を持つ選択対象を選択することである。Niedenthalらは、住居形態選択を題材にPMの有効性を検討した。実験では、自己概念と7種類の住居の代表的居住者に対するイメージを評定させた。その結果、住居形態選択にPMが作用することを支持した。PMが選択の際に作用する理由としては、認知的不協和の低減と自己一貫性の維持が考えられる。すなわち、居住地選択は1つの意思決定行為であることから、自己概念と居住地区の選択は密接な関係にあると言える。従って、居住地選択における意思決定要因の1つとしてPMの作用を考える。

3.仮説

地区選択は選択行為であるため、住居形態同様に居住地選択にも自己概念が影響し、PMが作用すると予測される(仮説1)。また、PMが作用した場合、認知的不協和の低減と自己一貫性を維持しやすくなることが考えられるため、PMの作用は、居住満足度に影響を与えと考えられる(仮説2)。

4.調査方法概要

(1)概要

質問紙法により調査を行った(6件法)。回収率は、仙台市泉

表-1 探索的因子分析の結果

項 目			
F ₁	流行ファッションへの関心度		
F ₂	家族とのレジャーへの関心度		
F ₃	自宅周辺の景観や雰囲気への関心度		
F ₄	レンタルビデオ店の利用度		
F ₅	コンビニエンスストアの利用度		
F ₆	仕事の重要性		
F ₇	ゆとりある生活の為の出費		
F ₈	通勤時の利便性への関心度		
	固有値	累積寄与率(%)	α係数
F ₁	19.6	19.6	.786
F ₂	13.6	33.1	.717
F ₃	10.8	43.9	.774
F ₄	8.56	52.5	.905
F ₅	7.10	59.6	.889
F ₆	6.07	65.6	.873
F ₇	5.60	71.2	.825
F ₈	4.99	76.2	.776

$$PM_{ijk} = \sqrt{\sum_{k=1}^8 (F_{ijk} - SF_{ik})^2} \quad \text{式-1}$$

PM=PM度

F_{ijk}=地区iに住む人が、地区jに住む人のライフスタイル項目kに対して行った評価

i=居住地区 j=評価対象地区 k=ライフスタイル項目

SF_{ik}=地区iに住む人のライフスタイル項目kに対する評価

区桂地区(38.7%)、青葉区上杉地区(22.0%)、泉区長命ヶ丘地区(66.7%)、青葉区愛子地区(50.0%)、平均年齢 51.5 歳(S.D.=12.06)、有効回答数は 266 部であった。

(2)ライフスタイル尺度の構成

ライフスタイルに関する 52 の質問項目に対し、探索的因子分析を行った。有効因子数の判定には Kaiser-Guttman 基準を用いた(固有値>1.0,累積寄与率>70%)。結果、8因子と判断し、.04以上の因子負荷がある質問項目を尺度として抽出した。累積寄与率が 76.2%であったので、各因子はライフスタイルを十分に説明していると言える。また、α係数を算出した結果、.70を上回ったので、全ての因子は一貫性を持っていると判断した。各因子の質問文の評定平均値を算出し、ライフスタイル尺度(表-1)とした。

5. PM の影響分析

(1)PM 度の算出

式-1に従い、PM度を算出した。PM度の値が小さいほど、評価した地区との自己概念が近いことを意味する。単純集計の結果、各地区の居住者は、自分が住んでいる居住地区に対するPM度が最も小さい値であった(表-2)。

(2)居住地におけるPMの作用

各地区の居住者が桂地区に対して持っているPM度が、

表-2 PM 度評定平均値

	評価対象地区			
	桂	上杉	長命ヶ丘	愛子
評価者桂	7.66	19.64	15.51	18.21
評価者上杉	19.06	7.95	18.74	20.97
評価者長命ヶ丘	16.92	20.59	6.35	15.96
評価者愛子	19.16	18.16	15.21	8.80

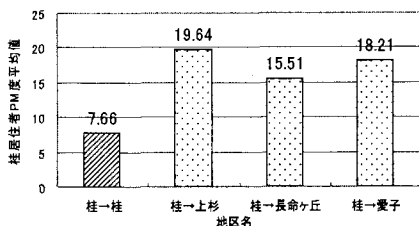


図-1 桂地区居住者の各地区に対するPM度

地区によって異なるかどうかを調べるため、多変量分散分析を行った。分析の結果、桂居住者が桂地区に対して持つPM度と、他の居住者が持つPM度(図-1)では有意差($F(3,262)=16.23, p<.001$)が認められた。また他の地区でも有意差は認められた。

次に、ある地区の居住者の調査対象4地区に対するPM度が、地区によって異なるかを調べるため、Bonferroniの方法を用いて対応のあるt検定を行った。分析結果は、桂地区居住者の上杉地区に対するPM度($t(57)=6.61, p<.001$)、長命ヶ丘地区に対するPM度($t(57)=5.05, p<.001$)、愛子地区に対するPM度($t(57)=6.78, p<.001$)であり、有意差が認められた。また、上杉・長命ヶ丘・愛子地区居住者から見た各調査対象地区においても有意差が認められた。このことは、居住地選択の際に、人は自分と類似したライフスタイルを持つ人が多く住むであろう地域を選択していることを意味している。

(3)地区毎の総合満足度とPMの関係

地区毎の総合満足度(居住地区への総合的な満足度)の評定平均値に差があるか調べるため、一元配置分散分析を行った。図-2は地区毎の総合満足度の評定平均値である。分析結果は($F(2,265)=13.07, p<.001$)であり、総合満足度には、地区毎に有意差があることが分かった。その後、多重比較(Tukey's HSD)を行った結果、桂・上杉地区と長命ヶ丘・愛子地区の総合満足度には有意差が認められた($p<.001$)が、桂地区と上杉地区の総合満足度には有意差が認められず($p=.709$)、長命ヶ丘地区と愛子地区の総合満足度も有意差は認められなかった($p=.998$)。この結果は、桂・上杉地区居住者は、現在の居住地区に同じ程度満足しており、長命ヶ丘・愛子地区居住者に比べて高い満足度であること意味している。

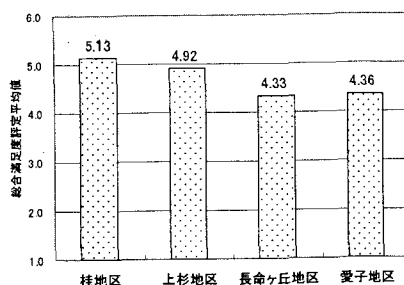


図-2 地区毎の総合満足度平均値

表-3 PM度と総合満足度の回帰分析

	標準化係数	有意確率	決定係数
長命ヶ丘地区PM度	-.258	$p<.001$	.067
愛子地区PM度	-.270	$p<.001$	.073

さらに、総合満足度と自分の居住地区に対するPM度によって、単回帰分析を行った(表-3)。その結果、桂・上杉地区では、PM度は総合満足度に影響を与えていないが、長命ヶ丘・愛子地区のPM度は、総合満足度に影響を与えていることが分かった。これより、桂・上杉地区では他の2地区とは異なるメカニズムで満足度が形成されているものと思われる。

6.結論

分析の結果、居住地選択の際にはPMが作用していることが分かり、仮説1は支持された。そのため、居住者は地区を選択する際、自己概念と対象地区の認識を比較し、自己概念と一致するライフスタイルを実現しやすい地区を選択していると言える。さらに、総合満足度には居住地区毎の差があることが分かった。しかし、桂・上杉地区では、PMの作用が満足度に影響を与えていないという結果であり、仮説2は部分的な支持に留まった。この結果は、PM以外の要因が居住満足度を高めていることを示唆しているものと思われる。

さて、居住地選択ではPMが作用していることから、各居住地には、類似の自己概念を持つ居住者が多く集まっていると考えられる。したがって、街並みや雰囲気などの地区の質的特性は、居住者の自己概念の影響を受けている可能性が高いと言える。また、人が生活する上で、思考や価値観が変化することは否めない。そのため、セルフプロトタイプの内容も時間経過によって変化していくことが考えられる。今後は、時間経過とPMの関係を考える必要がある。

〈参考文献〉

- 1)宮本和明・安藤淳・清水英範:非集計行動分析に基づく都市圏住宅需要モデル,土木学会論文集,第365号,IV-4,pp.79-88,1988.
- 2)林良嗣・富田安夫:マイクロシミュレーションとランダム効用モデルを応用した世帯のライフサイクル-人口属性構成予測モデル,土木学会論文集,第395号/IV-9,pp.85-94,1988.
- 3)山本真理子・外山みどり:社会的認知,誠信書房,1998
- 4)Paula M.Niedenthal and Nancy Cantor:Prototype Matching A Strategy for Social Decision Making,Journal Of Personality and Social Psychology,vol.48,No.3,pp.575-584,1985.